

マイッタ、参った ヒマラヤ イムジャ・ツェ峰

2006年10月~11月 山なかまシリウス個人4名



(ヒマラヤ街道最奥のチュクン集落より仰ぐイムジャ・ツェ峰 6,200m)

この項のタイトルは「やったぜ！ベイビー。ヒマラヤ・6200mでクライミング！」という予定だったのではあるが・・・。今は呪縛に墜ち込んでニッチモサッチモの態に相成っている次第である。

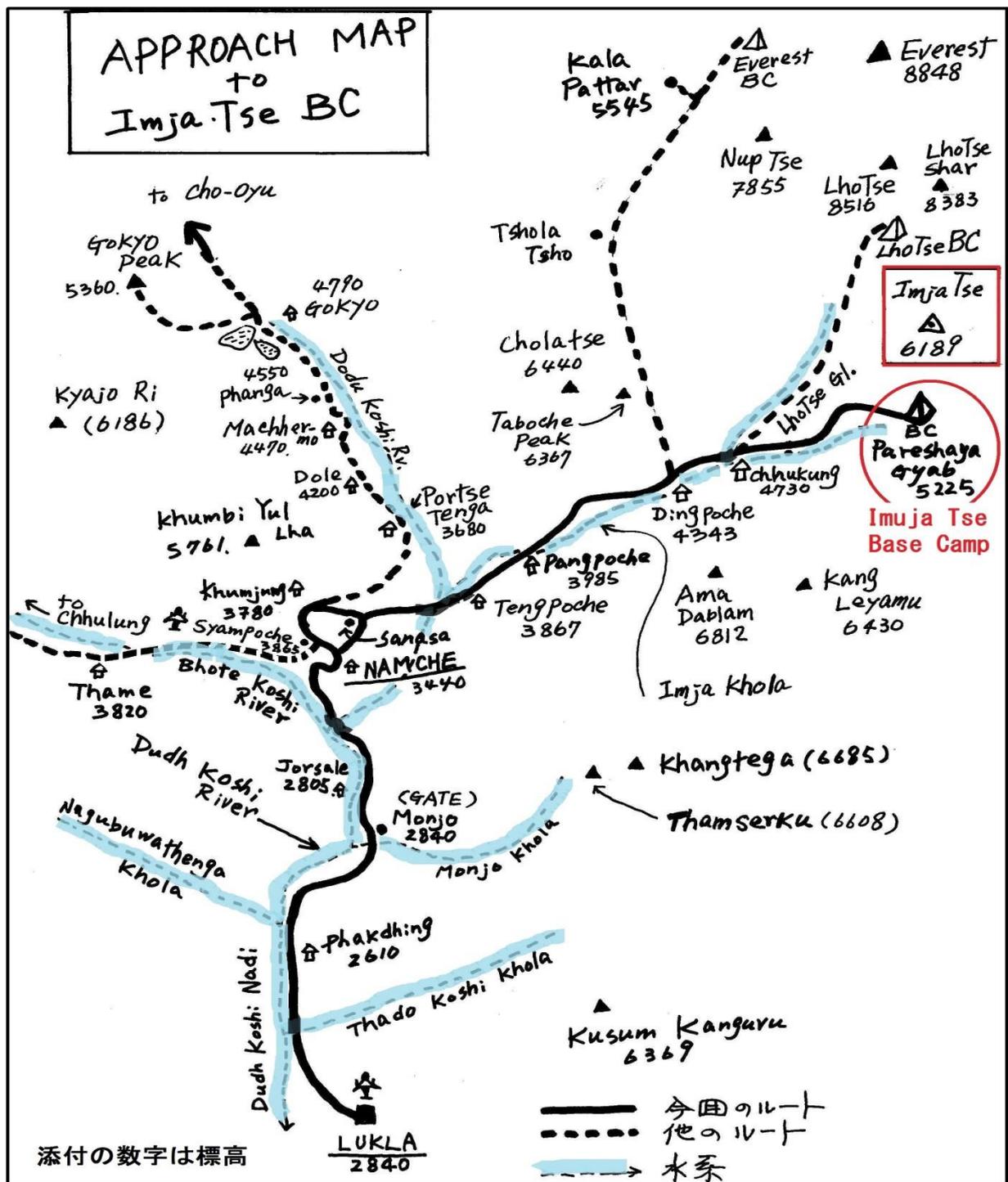
ヒマラヤには高い山が掃いて捨てるほどあるが、外国人に解放された登山対象の山は260座ほどであり、これらは概ね6000m以上の山々であって、ネパール政府またはネパール山岳協会の登山許可と入山料、それに現地公認ガイド同伴が登山許可の条件となっている。良く知られているように、この内14座が世界最高峰サガルマータ（エヴェレスト）をはじめとする8000m以上の高峰（所謂eight-thousanders）である。また、この260座のうち、比較的易しい（または標高が低い）30座ほどが「トレッキング・ピーク」として比較的緩やかな条件（入山料金が低いなど）で許可されている。所謂ヒマラヤ・トレッキングと称するツアーはこれらより低い山々や高原を巡るトレッキングコースで入山料やガイド同伴は不要となっている（国立公園入域料は必要）。

一昨年初めてヒマラヤ・トレッキングに行き来した。このトレッキングは、エヴェレスト、ローツェ、チョー・オユーなどの8000m級峰や、標高は6~7000m級のヒマラヤとしては低山ながら美しいヒマラヤ襞を纏った沢山の麗峰を間近に見ながらドゥドーコシ溪谷をゴーキョまで遡り、ゴーキョ・ピーク5357mに登るコースで、それはそれなりに楽しいものではあったが、やはりトレッキングは物見遊山の域を出ず、クライマー（？）を自負するワタシには何か不満が残ったものだった・・・。

そのようなことから、帰途赤鬼などと、「次回は、そんじょそこらの月並みトレッカーとしてではなく、我々の本分たるクライマーとして迫って見ようではないか」などと冗談を言い合っていたのが本当になった。（今から思えば、たった1回のヒマラヤ体験、しかも“月並み”トレッキング程度の経験しか無いのにも関わらず、このようなアンチョコな、渋谷かどこぞのミーハーよろしく事前のトレーニングも全く無しに軽々率々と出掛けてしまったことが、ヒマラヤの神々のお怒りを買う結果になったと、今では深く反省をイタシしているところである）。

種々の文献調査の結果、とりあえず初回は「トレッキングピーク33座」のうちでも比較的登りやすく、かつ頂上直下に急峻な200m程の雪壁があって、ここをユマーリング（固定ザイルに登高器を絡

めて登ること)で登らなければならないというクライミング的要素も備えた中級クラス 6200m のイムジャ・ツェ峰は如何かということになった。(この山は、国際的には「アイランド・ピーク」という名称で知られているが、ここでは現地名に敬意を表して以下「イムジャ・ツェ」と呼ぶ。エヴェレストも同様にネパール名の「サガルマータ」と書くことにする。「ツェ」とはシェルパ語で「ピーク」の意味である)。この山は、サガルマータから南に派生した山稜がローツェ (8501m)、ローツェ・シャル (8383m) という巉岩たる山巔を褶曲させ、標高差 3000m 以上も一気に落ち込んだ南端から再び立ち上がって、恰も島状の独立峰を形成していることから、50年程前のイギリス隊によって「アイランド・ピーク」と名づけられた。その後、ネパール政府はこの山を源とする川の名前である「イムジャ・コーラ」に因んで「イムジャ・ツェ」と改名した経緯があるそうだ。位置的にはサガルマータの南 7 km。8000m 級のジャイアントが轟く地域にある。行程から言えば、所謂エヴェレスト街道の始点ルクラから有名な集落ナムチェ・バザールで右折してイムジャ・コーラ源流まで遡り、サガルマータを盟主とするクーンブ・ヒマールの東端の壁に突き当たったドンヅマリにある。ルクラから徒歩で高度順応滞在日も含めてアプローチ 10 日間ほどの所である。



さて。

昨年末脳出血で倒れて、今は田舎の老人ホームに入居している独り暮らしの母の行く末を心配して、「もし留守中に何かあったら、いったいどうするお積り？ わたしゃ、田舎の習慣はサッパリですから、あなたが帰国するまでお弔いも放っておきますからネ・・・。それでも行くと言うなら、お母さんを連れてお行きになったら如何？」と憎まれ口を叩く山ノ神を何とか説き伏せてやっとのことでイクソダスに漕ぎ付けた。(可哀想に、いくら憎まれ口を叩いても女は女。小生の田舎の事情がサッパリ分かっていない山ノ神は、小生が出発したその夜、もし万が一の事があったら何をどうすべきか、田舎の誰に相談すべきか、役所の手続きはどうしたらよいのか、お寺はどこに頼めば良いのか、頼む坊主の人数は？ お布施はどのくらいすればよろしいのか、親戚はどこに連絡したらよろしいのか等々、解が全く得られぬまま一晩中呻吟し、高熱を発してド～ッと寝込んでしまったらしい。気の毒なことをしたが、マ、連絡手段の無いネパールの山奥にいるアッシにはたとえ母が如何なることになっていようとも、何の手の打ち様もありませぬから、それはそれで知らぬが仏というもので、忘れてしまえば気が楽というものでもありました)。

今回のパーティーは山なかまシリウスの赤鬼、パンチョ、慶応ボーイ氏との4人パーティーで、赤鬼が探してきた現地のエージェントにガイドその他を依頼した個人手配旅行となった。このエージェントのオヤジ(社長)はネパールトレッキング協会の副会長やネパール山岳協会の理事もやっているそうで、信用が置けそうだ。ネパールの東京大学に当たる国立トリブヴァン大学・大学院卒の経営学修士でもあるそうだ。トレッキングやアドベンチャー(ヒマラヤでは高所の「登山」をアドベンチャーと呼ぶ)のコーディネーターだけでなく、ナムチェ・バザールの上方のコンデ山群の近くに世界最高所のホテルをこの春オープンさせた経営者でもある。この会社は年間1000人近いドイツ人登山客(日本人は100名程度)を案内しているという。

それにチーフガイドにはサガルマータ登頂3回、その他8千メートル級にも多くの実績を有するガイド氏を充てるというから、マ、全てお任せで大丈夫だろう。それに、社長以下ガイド、ポーターにいたるまでヒマラヤ黎明期から8千メートル峰サポートで名を成したシェルパ族の出身者ばかりで固めているというのも心強い。

確かに高度順応をしっかりとこなすために充分余裕がある日程を組んでくれた。まあ、我々の歳(60歳台半ば)を考慮してくれたのもあろう。それにカトマンズ滞在時のホテルも5星クラスのThe Everest Hotelだから文句無し。トレッキングに比べて些か料金がするのは、所要日数が多いこと、危険な山であるからガイドやポーターのリスク費用が掛かることなどからやむを得ないことであろう(通常のトレッキングや、登山でもガイドだけ同伴の場合の登山費用はUS\$1,000強くらい。我々はガイド料他宿泊、食事などモロモロー式で\$2,400。これ以外にガイドへの登頂ボーナス、キッチンボーイ、ポーターへのチップなどが\$200)。

このところ、ネパールでは国王とマオイスト(毛派)が対立してあちこちでテロ騒動が起こり、それが山奥のヒマラヤ街道にも及んでいて、一時は海外からのヒマラヤ登山客が激減してトレッキング・エージェントや観光業者が立ち行かなくなっていたが、今年になってから国王側が譲歩しマオイストとの和解が成立したので、このような政情不安は無くなった。しかし、マオイストはヒマラヤ街道に私設の関所を設けて外国人から通行料を徴収し始めた。政府側も黙認しているらしい。ヒマラヤ街道に入る外国人の数は多いから、マオイストにとっては良い財源となり、また政府にとっても自国の腹を痛めずにマオイストを馴化できることにも繋がるから、これは双方がメリットを得る得策であろう。相場は入山者1人当たり1500ルピーと言われているが、我々はガイドが交渉して700ルピーで通らせて頂いた。ちゃんと領収書も発行してくれるので、二重払いはしなくて済む。

ルクラで編成された、ガイド、アシスタントガイド、コック、キッチンボーイ、ポーターと我々計11名、ゾッキョ(荷物運搬牛)3頭のキャラバンは好天が続く中をのんびりと出発。一昨年の時(4月)

と異なり、雨季が終わった今回のヒマラヤの空は一点の雲も無く澄み渡り、サガルマータ、ローツェ、ヌプツェの8千メートル峰や、クーンブ・ヒマールの前衛峰である6～7千メートル峰の秀麗なタマセルク、カンテガ、アマダブラム、コンデ・リ、クスムカングル、チョラツェ、タウツェなどが濃紺の空に純白のヒマラヤ襷の裳裾を輝かせて浮かんでいた。

ナムチェ・バザールまでの道は前回と同じであるが、今回はナムチェ・バザールでチョー・オユー方面への道と別れ、右折して東方のイムジャ・コーラ（川）沿いに遡ったので、前回見えた山々も別な方角から眺められて興味深かった。特にアラカムツェ峰、チョラツェ峰、タボチェ峰、(何れも6400m級の秀山で、大きな僧院が高所にあることで名高いタンボチェ集落の北方10kmに並んでいる秀麗な連嶺)は、前回のゴーキョ・ピークへの道から眺めたのとは逆の裏側から眺める格好になり、こちらの方が格段に神秘的で荘厳な姿であった。今回のガイドは山の名前にも詳しくて、新しい山が現れる度にその山名と登攀のルートや難易度を教えて呉れる。彼は30歳で、名前はティリ・ヌル・シェルパというが、我々は便宜上、“チリヌルヲワカ”と覚えこんだ。



(右よりアラカムツェ、チョラツェ、タボチェの峰々。
人物は左が赤鬼、右はガイドのティリ・ヌル・シェルパ)



(タンボチェの僧院にて)

ナムチェ・バザールからイムジャ・ツェ峰のベースキャンプまでのキャラバンでは、順次3集落に泊まって歩を進めたが、高度順応するためにそれぞれの宿泊地で2泊した。お陰で小生は高度障害も起こらず、僻地特有の下痢も出ず、極めてルンルン気分であった(他の3人は多少の高度障害や下痢で苦しんでいたようだった)。

イムジャ・コーラ最奥の集落チュクンを過ぎると、もうこの奥には人家やロッジは何も無い。ロッジが無いということはビールも買えないということである。従って今までは1日1～2本程度で我慢していた缶ビールを3本飲み溜めした。ここはまだ小生の飲酒限界である標高5000mには達していない場所であるが、どうもこれがイケなかったのかも知れない。高所での飲酒と喫煙は高山病の大敵であることはよく知られた事実であるが、私見では高所滞在から来る精神的ストレス予防の役目もあると思いたい。今回は5600mのハイキャンプまで喫煙していたことが神様のお怒りに輪を掛けたことは否めない。マア、高山病のことは先で再度触れるとして、歩を先に進めよう。

余談になるが、私は海外登山をする時には登山自体の他に、文化人類学的・民族学的学術調査を併せて行うことを常としている。黎明期の日本からのエクスペディションは全てこの方式であって、私もこれを踏襲している訳である。といえ、大袈裟に聞こえるが、何、たいしたことはない、キャラバンの道々その土地の生活をちょっと覗き見するというだけのことである。マ、それなりに現地の人々との意思疎通の方法と文化人類学の豊かな学殖が必要であるから、誰にでもできるというシロモノではないの

でアールが・・・。今回は「ヒマラヤ地域における厠と厨の文化人類学的研究」というテーマであったが、今回は「ネパール山地の電力供給事情の変遷とそれが及ぼす社会人類学的影響」と「シェルパ族の死生観と葬祭儀礼」という二つの命題に挑戦してきた。いずれ博士論文を書く積りであるが(ホンマかいな)、ここではそのサワリだけを紹介しておきたい。

まずは、前者について。一般的にネパールの電力は水力発電に頼っている。首都カトマンズでは電力の供給事情は日本と左程変わらないが、奥地に入っていくに従って電力事情は悪くなる。ルクラからナムチェ・バザール辺りまでは小さな木製の水車を川の流に浸しただけのミニ水力発電が多い。発電量も小さいから、一般の家庭では暗い豆電球が一家に一つ付いていれば上の部類である。ホテルやロッジにはそれなりの蛍光灯が設備されてはいるが、大抵は殆どが消されている。電柱などは無く、電線は道端や山の斜面に投げ出されたままである。ついでのことであるが、この地方は高山からの雪解け水が豊富なためか、水車がいたる所に設置されていて、穀物の粉挽にでも利用すればよろしいのに、その殆どがマニ車を廻しているだけであった。マニ車とは、道端や仏塔の中に設置されているお経が刻まれた木製のワッカで、通行者がこれを廻しながら通る仕組みになっている。大抵は「オンムニ・ペメ・フム・・・」

(蓮華の座におわします宝珠の仏様達)の梵字が彩色で刻まれていて、意匠的にも美しい芸術作品でもある。数珠を一つずつ数え廻す効用と同じく、これを廻せばお経を読んだのと同じ功德が得られるというシロモノであるが、他人(水)に廻させても功德が得られるというのは、まあ何というおおらかな宗教(ここはチベット仏教)であろうか。パンチョに言わせると、極めて横着な宗教ということになるが・・・。

ついでのこと、水車はかつて日本にあったような縦型ではなく、写真のような横型であった。縦型なら水を上から流す水路工事が必要になるが、横型なら流れに浸すだけだから、工事も不要でなかなか理に叶っているという次第。ナムチェ・バザールから奥は水力発電機は無いらしくて、ロッジでは太陽光発電に頼っている。弱い電力であるから時限を切った点灯しかしないが、最近では太陽光発電パネルが安くなったので普及の速度が速い。



(水車<底部>)。上が横着なマニ車)

次に後者(シェルパ族の死生観)について。ネパールでは街でも田舎でも墓というものにお目にかかったことが無い。この国の宗教はヒンドゥー教と仏教が卓越しているのだが、河畔で火葬にして川に流してしまうヒンドゥーは別にして、仏教の方はどうなっているのか。ゴンパ(お寺)も見学してみたが、お釈迦様が祀ってあるだけで檀家の墓や位牌などというものは見当たらない。この疑問は前回から頭の中にあっただので、今回ガイドのティリ・ヌルに聞いてみた。彼も仏教徒である(シェルパ族は大抵が仏教徒)。彼の話によると、一般の遺体・遺品は火葬にした後に全て水に流して、ハイ、人生一巻の終わり、後には何も残さないという。魂は山のあなたの空高く舞い上がってバライソに移り住むそうだ。特別に高貴な僧侶が山中で死んだ場合は山中に墓を作る場合もあるが、これは極めて異例であるとのこと。

さて、話が横道に逸れた。元に戻そう。ナムチェ・バザールから歩いて4日目にディンボチェ集落(標高4410m)に到着。ここはサガルマータ方面への道とイムジャツェ方面への分岐点でロッジも10軒くらいある“大都会”であった(下写真2葉)。裏山の丘には立派なチョルテン(仏塔)が数基建っていて、秀麗なアムダブラム(6856m)が間近に望めるビューポイントとなっている。



またまた余談であるが、ディンボチェ、ナムチェ、テンボチェ、パンボチェなどこの辺りの地名には「・・・チェ」というのが多いが、これはアシスタントガイドのニーマ・シェルパの言によれば、「ヤクが糞をする場所」という意味であるそうだ。糞をする場所というのはヤクの放牧地というほどの意味であろうか。なるほど、この辺りには積み石で囲んだ放牧地兼畑が猫の額を削って上に上にと段々畑状に作られており、カルカと呼ばれている。

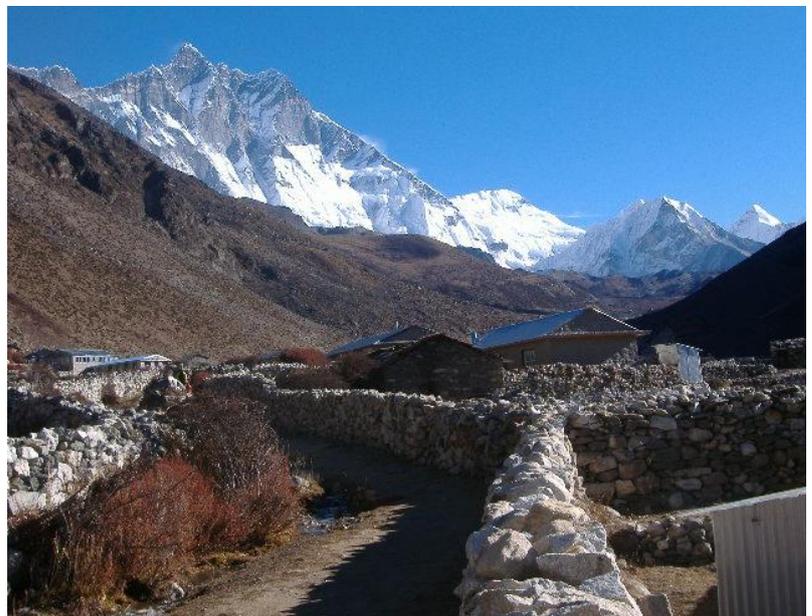
ここまで登って初めて今回の目標であるイムジャ・ツェ峰を拝むことが出来た。ここまでの道では目標は前山の影に隠れて見えなかったのである。溪の合間に見えるその姿は未だ距離があるために小さくしか見えず、登路などは観察できなかった。すぐ隣にローツェ 8484m 峰の壮麗なジャイアントが並んでいるために、これより2千メートル以上も低い我々の目標は大人の横にチョココンと並んだ幼児くらいにしか見えず、ガッカリとさせられたものだった。

帰国後、目標の写真を皆さんにお見せする時には、「隣のローツェが映っていない写真（例えば冒頭に掲げたもの）にしようぜ」などと言いつつ合ったものである。その落胆の様子は右の写真でご覧頂きたい。

(右最手前の黒い峰がイムジャ・ツェ峰 6200m、左のジャイアントがローツェ 8484m。中央奥の白いピラミッドはマカルー8463m。右端奥はチョ・ポール峰 6784m。最奥の集落チュンより)



(ディンボチェの丘から、ガスが流れるアムダブラム峰を望む)





(前ページ風景を望遠で引っ張ると、ますますイムジャ・ツェとローツェの差が拡大された)

ここから更にヒマラヤ街道最奥の集落チュクンを経て、イムジャ・ツェ峰ベースキャンプであるイムジャ氷河の末端に達して幕営。天幕も20張くらい張られていて、各国の登山隊で賑わっていた。我が隊のテントは客用2張、食堂兼ガイド用1張、炊事用兼コック他ポーター用1張でゆったりとしており、ゾッキョ(牛)3頭はその辺に放し飼いにしていた。



(右の土手を越えた下がイムジャ氷河湖)

今までのロッジ泊りの時と同じく料理の質量もちゃんとキープされていて有難い(ロッジ泊の場合でも、料理は全て同行コックが料理小屋で作る)。今回のコック、ゴパール君は料理の腕も抜群で、道中彼の作った料理を60回ほど食ったが、一度として同じメニューは出なかった。味付けも日本の味に腐心してくれていた。なかなかニクイ心配りであったので、ボーナス(チップ)もタップリと差し上げた。例えば、夕食の一例は以下の



(ガイドのティリ・ヌルとアシスタントのニーマ)

ような献立であった。オニオンスープ・ジンジャー&ガーリック味、水菜のサラダおひたし風、野菜大和煮風（オニオン、人参、カリフラワー、ピーマン）、メインは水牛串焼風、煮豆ケチャップ味、ふかしジャガイモ、焼トマト、ナン・カレー付き（インド風タンドーリで焼いた薄いパンにカレーを付けて食べる）、フルーツはマンゴー、紅茶。

ゴパールは愛想も良い。次から次にお代わりは如何かと注ぎ足しに来る。ただ、彼らは客の食事が済んだ後で食事し、また後片付けもしなければならぬから、「ユックリ、ユックリ、ドウゾ」と口では言うが、なかなか忙しない。という次第で、食事の時間も長くても15分程度であるから、勤めていた頃の昼飯と同じくらいのスピードにならざるを得ない。残念ながら、ビールでも飲みながらゆっくりとという願望はついに果たされなかった。

ベース・キャンプから最終のアタック・キャンプであるハイ・キャンプ（5500m）へ登る。距離は短いのであるが、これが急登で息が切れる。太陽が当たっていればポカポカの陽気なのだが、翳ると途端に零下の世界になって寒い。ハイ・キャンプは、大岩がゴロゴロした広大なガラ場で猫の額にテントを張った。イムジャ・コーラ源流を挟んだ対岸には間近にバルンツェ山稜（7000m級）の荘厳なヒマラヤ巒が聳え、その下方にはズタズタに切れたイムジャ氷河が繋がっていた。



（雷鳥くらいの大きさの鳥が遊びに来た）



（ハイ・キャンプ）



（テント越しにイムジャ氷河対岸のバルンツェ山稜を見る）

夜間は急速に温度が下がって、たぶんマイナス20度くらいにはなっていただろう。食事も、今晚はハイ・キャンプという悪条件下であるから簡単なものであった。どうも食欲が殆ど無い。早々とシユラブに潜り込んだが寒くて寝られない。おまけに、夜中に咳に苦しめられ始めた。発作のように連続で咳き込むので胸が苦しい上に、腹筋が痙攣して痛くて堪らない。身体を起こして正座すると多少は咳が収まるので、これは高山病の重篤症状である高所肺水腫にやられたのに間違いなからう。ベース・キャンプまでは、高度反応や下痢に悩まされていた相棒を尻目に、こちらはルンルン気分、余裕綽々と登って来れたのに、いよいよ明朝6200mにアタックという時になって、このザマは一体何なのか？

マ、明朝になれば多少は落ち着くかと淡い期待をかけて目をつむってみるが、状況は悪化するばかり。ダイアモックス（高山病治療薬）を服用してみたが験は現れない。

一睡もできないうちに午前2時、ゴパールが朝粥を配りに来たが、全く喉を通らず。頭も少し朦朧としてきた。咳き込みながら覚束ない手つきでオーバーズボンやオーバーパーカー、オーバー手袋を着込み、ハーネスを装着して午前3時に出発した。どうも身体が前に進まない。他人の体のようだ。ハイ・キャンプから頂上への道は、狭いゴルジュ帯を抜けて行くのだが、ヘッドランプを点けても真っ暗な道

である上に、目にも異常をきたしてきたのか足元が段々見えなくなってきた。御名御璽。神様、仏様。行くべきか戻るべきか、暫し廻らない頭で葛藤した。ここまで来たのだから、這ってでも登頂はしたい。しかし、さらに上のより困難な場所でリタイアする羽目になれば、残るパーティー全員もリタイアせざるを得なくなることは必定。上に行けば行くほどパーティーへの迷惑が大きくなる。「迷惑」だけで済めばよいが、もっとシビアな事態になることが予想されるのだ。

ついに2時間登った所で、上方に居る赤鬼にリタイアを宣言。「ガイドのティリ・ヌルに伝えて欲しい。小生は此処でリタイアするが、下山は独りでできるから皆さんはそのまま登頂を続けてくれ。小生は高度を下げるためにベース・キャンプまで下って待っているから」と。

意気消沈して独りでトボトボと下山の途中、登って来た10人ほどのフランス隊に会った。

“Bon jour et bon voyage”と挨拶するくらいのアタマと気力は未だ残っていたが、先方はこんな早朝に独りで降りてくる奴はきっとリタイアした奴に違いないという目付をして通り過ぎて行った。ワタシはますます落ち込んだ。

疲れ果てた重い足を引きずりながらベース・キャンプに戻ってみると、我が馬方のポーターが一人で留守をしていた。テントは炊事用簡易テントだけを残して他はハイ・キャンプに荷揚げしてあるので、寒さを防ぐテントも無い。寒いのを我慢して地べたに寝転んだ。馬方が早速紅茶を入れてくれた。精神が動揺しているのかタバコが吸いたくてしょうがないが、もう1本も残っていない。

登頂後ベース・キャンプまで戻って来る予定の我がパーティーを待つが、予定の時間になっても帰還しない。そのうち夜の帳が降りてきた。真っ暗だ。アリヤリヤ？これは何処かで遭難でもしたのか？雪壁登りのユマーリングに失敗して誰かが墜落でもしたのか？それとも下山途中の懸垂で誰かが墜ちたのか？それとも下山が遅くなってもう1泊ハイ・キャンプ泊りにでも変更されたのか？

正直言って心底心配になってきたが、何の情報も無いもどかしさ。もしハイ・キャンプ泊まりになれば、小生はシュラフも無ければ（ハイ・キャンプに残置したまま）食べ物も無い。ここでシュラフ無しで一晩明かすと凍死するから、一番近いチュクン集落まで下ってどこかのロッジに泊まらなければならないが、一回通っただけの真っ暗な道を独りでチュクンまで下る自信がない。あ〜ア、全く弱りにケリな、徒(イヌラ)ニ眺メ(長雨)セシ間ニ・・・。

悩んでいるうちに、暗闇の中をアシスタントガイドのニーマが戻って来た。天にも昇る気持ち。助かったナア〜。聞けば、全員登頂。ハイ・キャンプに戻ったのが16時半、それから天幕を撤収してやっと今先発で帰還したのだという。皆は未だ帰る途中だと言う。ハイ・キャンプへの道の遠方に確かにヘッドランプの灯りがいくつか見え出した。一目散に迎えに走るが、息が切れるのと足が縛れるので前にツンのめる。

[登頂直前の我がパーティー]

(左：頂上直下の急斜面をユマーリングで登る)

(右：山頂にて)



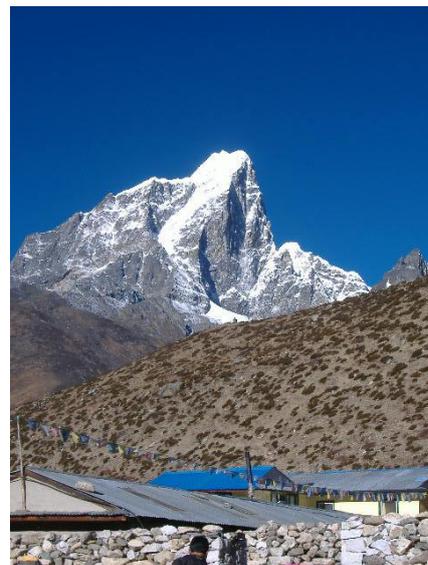
皆さん、本当にご苦労さん、**Congratulations!!**。皆、相当に疲れていて言葉も出ないほど。特に疲労困憊の極に達していた慶応ボーイ氏は足もフラフラとしていて極限の状態。ザックを引き受けた。

朝3時にハイ・キャンプを出発してからハイ・キャンプに戻るまで13時間半、さらにベース・キャンプまでの下山が2時間半、合計16時間の苦闘であったようだ。同じ16時間でも日本のような低山と異なり、標高6000メートルという酸素量が平地の1/2に満たない高山での苦闘であるから、その苦労は並大抵ではない。



(Imja Tse 登頂の様子 [他のパーティー]。asiaexplorationtreks.com より引用)

翌日ディンボチェまで下り、裏山を越えて1時間ほどの所のペリチェの高山病診療所（シェルパの診療の為に作られ、**Himalayan Rescue Association** が運営している）で診断を受けた。20日間風呂にも入らず下着も替えていない身体はきっと鼻がモゲルくらい臭かったと思うが、アメリカ人の若い女医は丁寧に診てくれて、推測どりの高所肺水腫と診断を下し、ニフェジピンを投薬してくれた。診断料\$50.、薬代\$3.。\$60.をお支払いして、お釣の\$7.はレスキュー協会に寄付した。



(ペリチェの高山病診療所。バックはアラカムツェ峰)



(アラカムツェ、チョラツェ、タボチェの
秀麗な奇峰を見ながら下る)

エージェントが組んでくれた日程に余裕があり、カトマンズに帰り着いてから帰国便出発までに5日間ばかりの暇ができたので、バスでポカラへ2泊3日の旅に出掛けたり、カトマンズで旧蹟など見て回ったが、これはまた機会を改めて報告したい。

今回、高山病で登頂できなかったという呪縛とトラウマが身体に棲みついてしまった。今までの経験から6000mまでは高山病は大丈夫と思っていたのだが、この自信も露と消えてしまった。4人のうち小生だけが高山病で登れなかったことは、誠に残念無念で帰国後皆さんに合わせる顔も無いが、海外登山をやっている山友達は理解してくれよう。しかし、出発の前に、山ノ神や娘から「お父さん、今回は大丈夫？ またまた、失敗の巻に終るのでは？」と言われて、「何をぬかすか。こん畜生メ。今回は片目のケンケンだワイ。この程度の山なら充分に拙者の実力範囲。余は日本山岳協会公認の山岳上級指導員であるゾ。バカにするナイ」と豪語した手前、彼女達に合わせる顔が無い。あ～あ、弱ったナア～。赤鬼は、「隊長というモンは、ベース・キャンプにドーンと陣取って、登頂班を登らせるのが役目」と慰めてはくれたが・・・。

このままでは海外高所登山は諦めざるを得ないのかという瀬戸際に陥っている。我が山ノ神曰く「他の3人と何が違っていたのか、よくよ～く考えてみなサ～イ」。

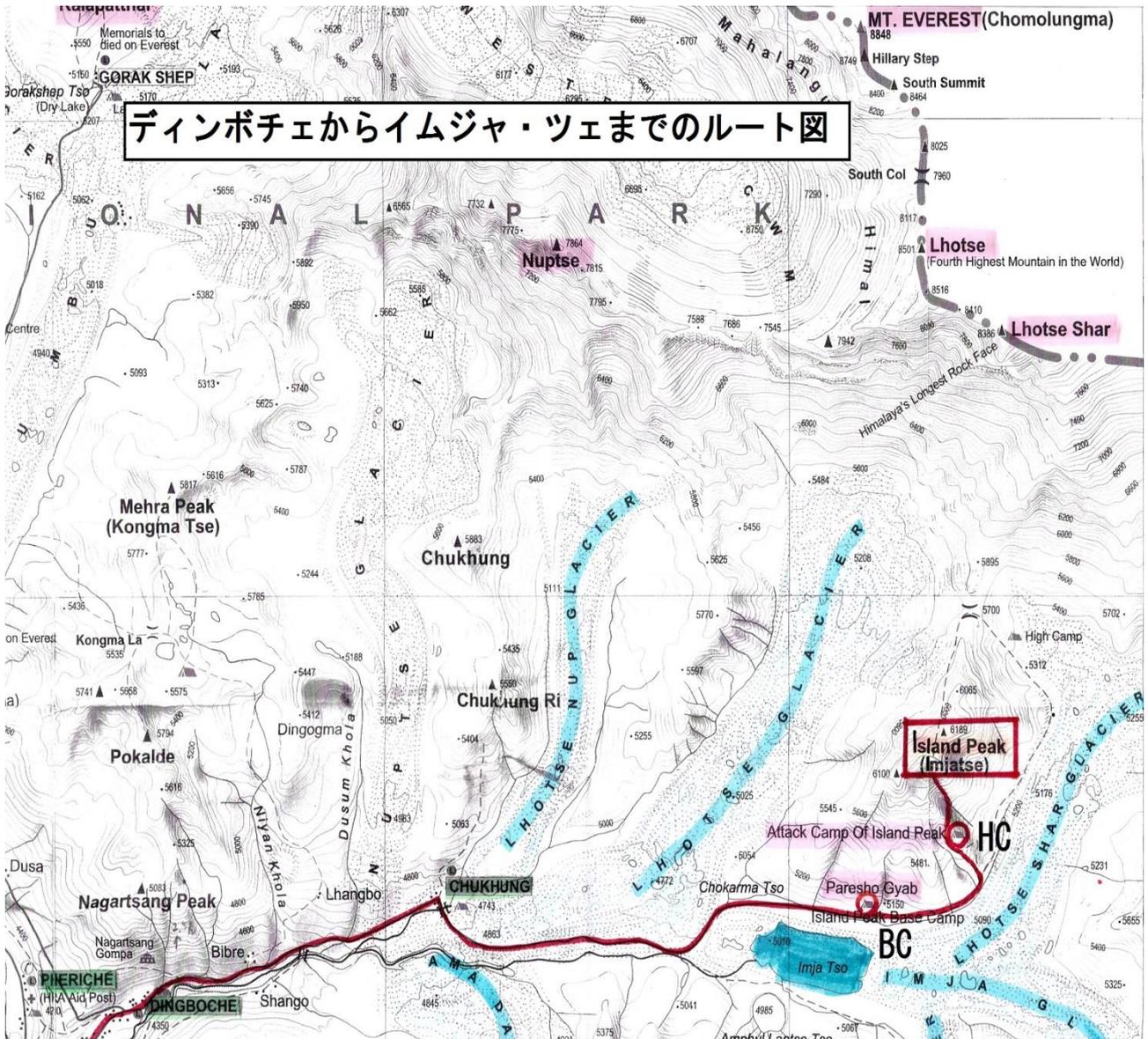
よくよく考えてみた。(1) 高所登山の体力・知力には遜色を認めず。(2) 高山病の大敵と言われる酒は4人とも大蛇クラスでこれも差異は認めず。さすれば、残るは何か。山ノ神が追い討ちを掛けてきた。「これを機に禁煙して登山を取るの？それとも登山は諦めてタバコ継続を取るの？どちらかに決めなさい」。トホホ。マ、これはタバコでも吸いながらゆっくりと考えることにしよう。

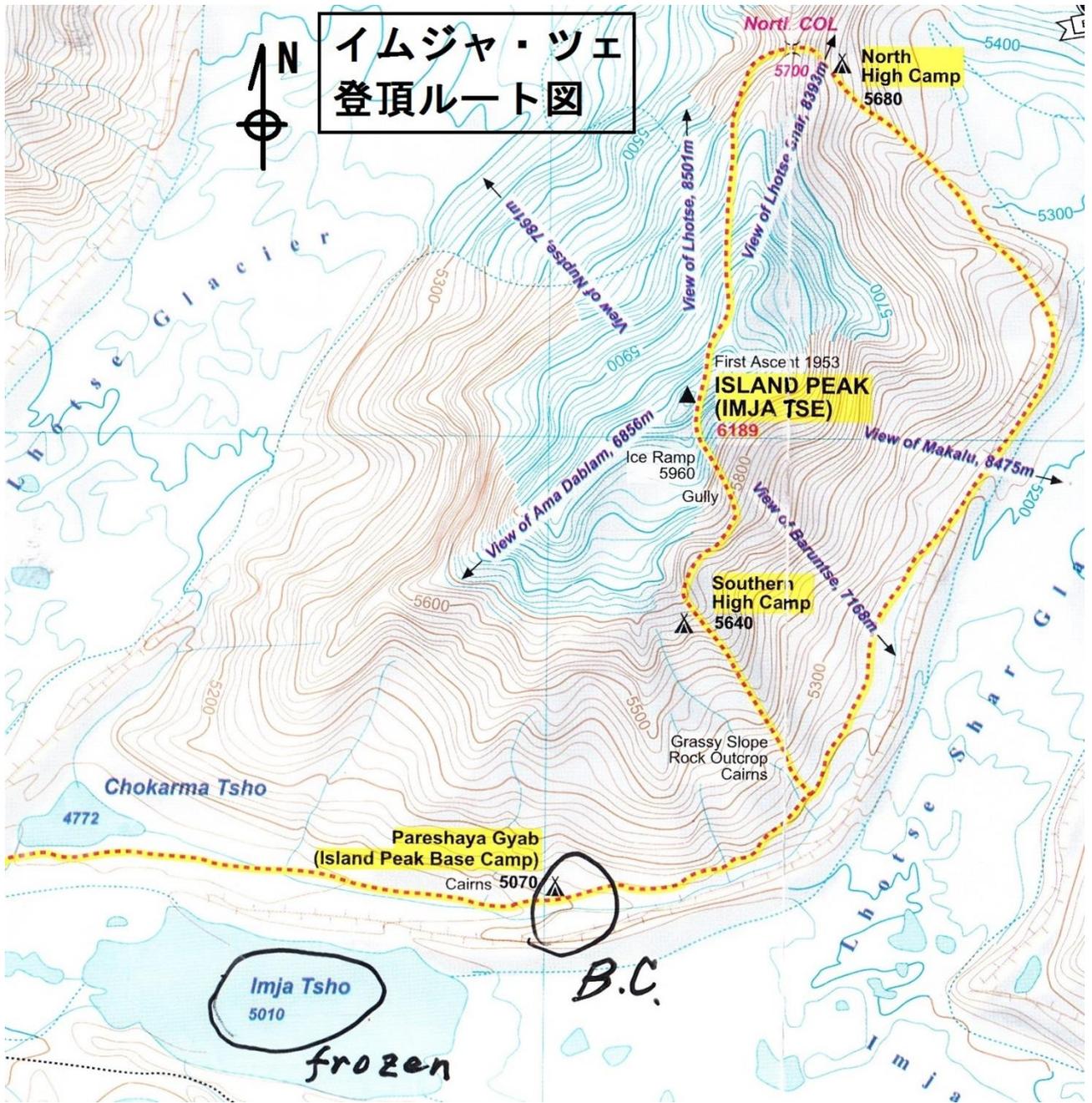
トラウマから解脱するには、実現可能なワンランク上の目標を目の前にぶら下げるに限る。イムジャ・ツェが成功したら次はアムダブラム峰(6856m)と秘かに考えていたのであったが、エージェントのオヤジの話では登山費用が15,000ドルほど掛かるらしいから、これは諦めた。その代わり、幸いに別の良い目標が見つかった。ナムチェ・バザールの西方にコンデ山稜という美しい山々が聳えている。この盟主がコンデ・リ(6187m)という針峰で、なかなか見事な山である。ナムチェ側から眺めると、どこも急峻な雪壁とカミソリの歯の岩稜だらけでとても登れそうにないが、反対側からなら登れるルートがあるそうで、登山費用もイムジャ・ツェと同じくらいだそう。それに、この地域へは日本人は入っていないというから、ひょっとすれば日本人の初登頂ということになるのではあるまいか。カトマンズの本屋でこの山のガイドブックを買い込んで来たので、大いに研究してみようではないか。



(次の目標、コンデ・リ峰6187m。タンボチェより撮影)

ご参考までに、若干のイムジャ・ツェ峰の登山ルート資料を以下に掲げて、本稿の終わりとしたい。





衛星画像から見たイムジャ・ツェ付近



(EARTH OBSERVATORY, NASA 2010. 10. 17 より引用)

(本稿 完)

[⇒「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)